

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02616

研究課題名（和文）保育参加を通じた親の「学びの物語」アプローチとルーブリック評価の開発

研究課題名（英文）Development for "learning story" and "Rubric" through parental participation in early childhood education and care

研究代表者

永田 誠（NAGATA, Makoto）

大分大学・教育学部・准教授

研究者番号：50435369

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、保護者懇談会での親の「語り」の分析、親の保育参加に関する実態調査、「困難を抱える家庭」への保育分析に取り組んだ。「コロナ禍」での親の保育参加の取り組みが継続する中で、当初の緊張感や不満、抵抗感が軽減され、父親の参加が多くなるなど、新しい連携の姿が生まれてきた。こうした園・保育者と家庭・親が日常的に交流する関係性を構築・維持・発展する過程こそ、「質の高い保育（ECEC）」政策提言項目第7「乳幼児期サービスに家族とコミュニティの参加を促すこと」（OECD）の具現化であり、教育・保育・子育て支援を統合した生涯学習基盤（social pedagogy）の創出につながるものであろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義や社会的意義として、特筆すべきは「コロナ禍」という未曾有の危機に直面し、その危機を乗り越える幼児教育・保育施設の姿を、詳細に記録することができた点であろう。「コロナ禍」は、感染予防のための人流抑制や「三密回避」によって、これまで当たり前であった家庭と保育施設での子どもの様子や親の子育ての想いを共有することが制限・縮小されるという「子育てコミュニティ」の崩壊・断絶の危機を生起させた。その際、私たちに見えてきたのは、それでも子どもの健全な成長発達を願う親と保育者の想いであり、エッセンシャル・ワークとして社会活動を維持する教育・保育（施設）の存在であった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted 1) an analysis of parents' comments at parent meetings, 2) a survey on parental participation in early childhood education and care, and 3) an analysis of families with difficulties.

In a post-Covid-19 society, parental participation has provided new avenues for cooperation between parents and care facilities for early childhood education. For example, we have observed a reduction in tension, dissatisfaction, and resistance among participating parents and an increase in the participation of fathers. Daily interactions between parents and caregivers lead to the creation of social pedagogy.

研究分野：教育学，子ども学

キーワード：親の保育参加 親の学び 家庭との連携 保育の質の向上 子育て支援

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、「保育参加を通した親の「学び」は、親自身の養育力向上と、保育の質の向上に向けた改善を生み出すのではないか？」である。(図1)

(1) 本研究の学術的背景，研究課題の核心をなす学術的「問い」

本研究グループでは、2015年度から2018年度において基盤研究(C)「子どもと親の学びを生み出す発達資産としての生活体験を育む「地域家庭教育支援」(課題番号15K04309)に取り組んできた。そこで明らかとなった課題は、園等によって親・家庭における幼児の日常生活の関わりが異なる要因は何かという点である。「少子良育戦略」や「家庭の自己責任化」を受け止め、促進的に役割を果たそうとするがあまり、教育家族による「愛という名の支配」「やさしい暴力」(柏木2008)による子育てを具現化する親・家庭の存在も想像に難くない。これは社会変容や地域特性による影響は少なくないが、無自覚的に受容している家庭がある一方、自覚的に対抗する「生活」をつくり出す親・家庭もある。そのため、子育て家庭における親のロールモデル形成に向けた生活の自覚化や子ども理解の深化のための経験的な「学び」の過程の創出が希求される。この保育実践で生み出される「学び」の過程では、親同士や親・保育者の協働的關係を創出し、「子育てコミュニティ」の基盤ともなっていく。

学術的背景としては、家族の多様化により、成長・発達の基盤となる生活が崩壊し、個別支援では支えきれない事態(貧困・格差、孤立化)を招く中で、保育がいかに「子育て」における社会的機能を再生することができるかが問われている。ただ、保育における「学び」の可視化と家庭・地域の教育基盤形成過程に関する実証的な研究蓄積は浅薄であり、特に親(家庭)を含めた生活全体で捉える視点は乏しい。2018年度に改訂された幼稚園教育要領等には、小学校就学段階での育ちの姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示された。その契機となったOECD『Starting Strong』では、「質の高い保育(ECEC; Early Childhood Education and Care)」が示され、具体的な政策提言項目の第7に「乳幼児期サービスに家族とコミュニティの参加を促す」ことが提起されている。したがって、親の保育参加は説明責任・リスクマネジメントといった消極的側面にとどまらず、「親の養育力の向上」と「保育の質の向上」を共に実現する可能性を有する。

図1 研究全体の概念図

課題・背景	<ul style="list-style-type: none"> ●学術的問い：保育参加を通した親の「学び」は、①親自身の養育力向上と、②保育の質の向上に向けた改善を生み出すのではないか？ ●背景：個別支援では支えきれない事態(貧困・格差、孤立化)を招く ⇒保育がいかに「子育て」における社会的機能を再生することができるか問われる
事業期間内	<ul style="list-style-type: none"> ●目的：保育参加を通した親の「学び(=子ども理解の深化と子育て・保育の自覚化のための省察過程)」を、「学びの物語(ラーニング・ストーリー)」から明らかにする ●独自性：①保育・家庭教育を「子育て」という教育的営為から総体的に捉える、②親と保育者の「学び」の過程を「学びの物語」と「ルーブリック評価」から検証する
事業終了後	<ul style="list-style-type: none"> ●到達目標：保育参加による親の「学び」と、そこから生成する保育改善(保育者の「学び」)の過程の解明を図る ●波及効果：「親の学びルーブリック」と「子育てデータベース」を、親・保育者自身が自己省察するポートフォリオとして活用する

(2) 関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

子育て中の親を対象とした研究は、心理学における養育態度や障害の受容等に関する研究として膨大な研究蓄積を有する。保育学・子ども学でも、子育て支援が制度化され、保育者の職務として位置付けられる中で制度研究や実践事例報告が散見されるようになってきた。実際に、CiNiiで親を対象とした保育関連の論考は3187件ヒットするものの、その内「親の参加・参画」をキーワードとするものは200件程度にとどまる。加えて、その多くは、親の参加・参画による意識変容を量的に把握するものやペアレンティングとしての行動様式・技能訓練の実践報告にとどまり、保育が親自身に及ぼす変容を「学び」という視点から捉え、その「学び」をもたらし過程と要因を検証した研究は稀少である。

本研究グループは、当初は子育て支援や家庭教育を範疇として、子育てにおける親の学びに着目し、研究を継続してきた。その蓄積をもとに、本研究では親の保育参加による「学び」の過程を、「学びの物語(ラーニング・ストーリー)」より明らかにする。「学びの物語」は、ニュージーランド乳幼児統一カリキュラムの評価方法であり、日本の保育現場でも導入が試みられつつ

ある。「学びの物語」の特質は、丁寧な対話と記述による対象者理解の深まりにある。それにより、これまで評価者の主観性から脱却し、子どもの「学びの構え」を適切に捉えることを可能とした。(Carr2001, 大宮 2010)

よって、親の「学び」の過程を親自身の主観的評価ではなく、他者によるアセスメントによって実証するために、「学びの物語」論から親の「学び」にアプローチすることは研究的期待も少くない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育参加を通じた親の子育てにおける「学び」を、「学びの物語(ラーニング・ストーリー)」の手法を用いて明らかにすることである。加えて、「親の学びループリック」をもとに検証を図ることで、「学び」の妥当性も確認する。これらの事例の蓄積を通じて、親・保育者自身が自己省察するポートフォリオとしての活用方策の検討を行う。これまでの研究成果より、本研究における子育て過程での「学び」とは、「子ども理解の深化と子育て・保育の自覚化のための省察過程」と定義する。

本研究の学術的独自性としては、保育・家庭教育を「子育て」という教育的営為から総体的に捉える点にある。(図2) 保育における保育者と親の協働は、歴史的には共同保育所運動等の蓄積があるものの、制度化により<支援者被支援者>に固定・分断されてきた。ただ、2018年の保育所保育指針では、保育・子育て支援をサービス関係から脱却し、親の成長や学びを促す教育的要素を付加した実践が求められている。よって、親と保育者の「学び」の過程を「学びの物語」と「ループリック評価」から検証することは、子育て過程での大人の「学び」を可視化することにつながる。

本研究の創造性としては、本課題において開発する「親の学びループリック」と「子育てデータベース」を、親・保育者自身が自己省察するポートフォリオとして活用する社会的波及効果を創出する点である。親の「学び」を可視化する「親の学びループリック」と「子育てデータベース」は、保育分野での「Society 5.0」プラットフォームとしての活用・普及も期待できる。さらに親と保育者の協働関係構築を通してSDGsの「4 質の高い教育をみんなに」の具現化を果たす就学前教育・保育施設のホリスティックアプローチ・モデルとして「貧困・格差」、「孤立化」に抗する社会的機能の確立に寄与する。

3. 研究の方法

(1) 新型コロナウイルス感染症における影響を踏まえた研究計画

本課題の研究期間中においては、1年次(2019年度)終了時点で、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染が拡大し、多大な社会的・経済的影響をもたらした。それに伴って、就学前幼児教育・保育施設も、休園や感染拡大防止のための人流抑制を余儀なくされたため、保護者懇談会をはじめ親の教育・保育参加の行事・取り組み自体が中止となるなど、2020年度の調査実施が不可能となった。加えて、感染拡大の収束が見通せない状況の中で、当初の計画のまま研究を遂行することも困難と判断し、研究分担者の同意のもとに、再度、計画の見直しを行った。

具体的には、以下の3つの調査研究を、残りの研究期間で実施することとした。

保護者懇談会での親の「語り」の分析

：保護者懇談会が中止となったため、それまで調査を実施していたデータをもとに分析を行い、親の語りから<子育て>における「学び」を考察する。

親の保育参加に関する実態調査(保育施設/質問紙・インタビュー)

：「コロナ禍」であっても、親の保育参加(保育参加体験)を実施している園1園に依頼し、参加家庭・親ならびに保育者への調査の承諾を得た。具体的には、2020年度を予備調査期間と設定し、質問紙を開発した上で、2021年度より、参加保護者を対象とした事前・事後調査ならびに保育者へのペーパーインタビュー(論述式)を3年間実施した。(現在継続中。)

「困難を抱える家庭」への保育参加分析(親・保育者/参与観察)

：保育者による保護者支援の観察記録を分析し、保護者支援に関する専門性の向上過程や困難を抱える家族への効果的な支援方法を探索的に明らかにする。

また、当初の研究計画とは異なるが、「コロナ禍」によって従来の保育参観の中止や園行事への参加制限等に代表される園・保育者と家庭・親との交流の減少・断絶をもたらした。その一方で、「コロナ禍」を通じた園と家庭をめぐる新たな保育課題の表出は、園・保育者と家庭・親の双方に交流・理解と連携・参加の重要性が再認識され、個別・小集団での保育参加の取り組みな

図2 本研究課題における概念的枠組み



ども生まれていることを踏まえ、ポストコロナ社会において幼児教育・保育施設 / 保育者がどのように事態に対応してきたか、「コロナ禍」を経験したことによる家庭との連携・協働の必要性について、質問紙調査から保育者の意識変容と園の具体的取り組みを把握する調査を2023年3月～5月に実施した*。調査協力が得られたのは16園の保育者257名であった。

*この調査結果については、現在、分析・論文投稿中であるため、本成果報告書には未掲載である。

4. 研究成果

本研究の成果としては、まず特筆すべきは「コロナ禍」という未曾有の危機に直面し、その危機を乗り越える幼児教育・保育施設の姿を、詳細に記録することができた点であろう。この点については、当然ながら、当初の研究計画とは異なるものであったが、「コロナ禍」という人類の危機において、幼児教育・保育においては、事業者と利用者というサービス関係を越えて、人としていかに生き、生活していくかという命題に、親も保育者も直面したのである。

「コロナ禍」という危機は、感染予防のための人流抑制や「三密回避」によって、これまで「当たり前」であった子どもの受け渡しや家庭・保育施設での子どもの様子の共有、何気ない普段の生活の様子や子育ての想いを共有することが制限・縮小されるという「子育てコミュニティ」の崩壊・断絶の危機を生起させた。その際、私たちに見えてきたのは、それでも子どもの健全な成長発達を願う親と保育者の想いであり、エッセンシャル・ワークとして社会活動を維持する教育・保育（施設）の存在であった。それは時に、オンラインでの保育や遊びの提供であったり、ICTを活用した日々の健康チェックを介した園と家庭の連絡・情報共有・相互交流であったりと形を変えながらも、感染に細心の注意を払いながらの乳幼児同士や乳幼児と保育者・親とのふれあいを生み出してきたのである。

上記を踏まえ、すでに種々の論考にて指摘され、本研究グループでも、こうした「コロナ禍」における対応において、家庭との連携・協働の必要性の再認識と、ポストコロナ社会における親の教育・保育参加の萌芽を確認することができた点は第2の成果であろう。（現在、投稿中のため成果報告書には未収録のものも一部含まれる。）

「コロナ禍」の影響やその対応についての評価は、依然として現在進行形であるため軽々に言及することはできないものの、その時点でできる「子どもの最善の利益」を保障する最良の対応を、多くの幼児教育・保育施設は行ってきたのではないだろうか。そして、そうした「子どもの最善の利益」を保障する最良の対応こそが、改めて「子育て」に関わる大人の共同を基盤とした「子育てコミュニティ」の再生・発展へとつながってきたことは大きな成果と言えよう。

これまで教育・保育における代表的な親の参加場面としては、保育参観と行事参加だったのではないだろうか。しかし、集まることが難しい事態の中で、個別・小集団での保育参加が創出された。それは単に集団規模が小さくなったという目に見える変化にとどまらず、各家庭の多様性に配慮した個別的な対応へつながらるとともに、日常的な保育参加という形態を生み出す契機となったのである。実際に、「コロナ禍」での保育参加体験においては、保育者からは親から見られることの緊張感などから必ずしも前向きとは言えない意見も散見されていた。加えて、保護者もこれまでと参観・参加形態が変わることや「特別」ではない日常の保育を見ることへの不満の表出、我が子やその友だちと生活・保育活動を共にすることへの抵抗感なども聞かれた。しかし、「コロナ禍」での取り組みが3年間継続していく中で、そうした緊張感や不満、抵抗感が次第に軽減され、むしろ、父親の保育参加が多くなるなど、新しい連携の姿が生まれてきたことを看取することができた。こうした園・保育者と家庭・親が日常的に交流する関係性を構築・維持・発展することこそ、OECD『Starting Strong』で提起された「質の高い保育（ECEC；Early Childhood Education and Care）」政策提言項目の第7「乳幼児期サービスに家族とコミュニティの参加を促すこと」の具現化であり、教育・保育・子育て支援を統合した生涯学習基盤（social pedagogy）の創出につながるものと位置付けられよう。

最後に、本研究の課題として2点指摘しておきたい。

第1に、本課題の到達目標であった「子育て」過程における親の「学び」の詳細を明らかにすることには十分に至ったとは言えない。保育参加を通じた「子育て」における親の「学び」の姿についての継続した調査が求められる。特に、本研究課題の独創性の一つである親の語り等による質的実証研究については、研究方法の深化・確立が課題である。

第2に、この「コロナ禍」において変容してきた親の教育・保育参加の実態をより広範かつ詳細に把握する必要がある。個別・小集団での日常的な保育参加が、親自身にどのように受け止められていくのか、そして、保育者や幼児教育・保育施設にどのような変化をもたらすのかを明らかにすることが期待される。特に、幼児教育・保育施設の多様な保育理念・カリキュラム、そして地域・文化的背景といった要因とどのような位相を示すかは重要な論点となろう。加えて、「コロナ禍」前の保育を知る保育者とポストコロナ世代の保育者が、価値観の相違を乗り越えともに保育を創造していくために、組織・集団としての保育者の力量形成と基盤となる関係性構築の過程を解明していくことも期待されよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 17件）

1. 著者名 正平辰男・原和也・桑原広治・末寄雅美・宮嶋晴子	4. 巻 23
2. 論文標題 飯塚市庄内生活体験学校における保育者を対象とした生活体験プログラム 保育者体験講座の実践分析を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会誌『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永田誠・菅原航平・大村綾	4. 巻 24
2. 論文標題 ポストコロナ社会における家庭との連携に関する保育者の意識と保育の変容	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋晴子・垂見直樹	4. 巻 -
2. 論文標題 保育者の保護者支援の具体的過程と専門性の獲得 保育者による観察記録をもとにした調査報告	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 「保育参加を通じた親の「学びの物語」アプローチとルーブリック評価の開発」研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大村綾	4. 巻 -
2. 論文標題 保護者を対象にした保育参加に関する研究の動向 保育における子育て支援とのつながりに着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 「保育参加を通じた親の「学びの物語」アプローチとルーブリック評価の開発」研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田 誠	4. 巻 44
2. 論文標題 <子育て>過程における親の「学び」に向けた基礎的研究：学会誌掲載論文の分析から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51073/17057	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原 航平	4. 巻 42
2. 論文標題 放課後児童クラブにおける障害児支援や職員研修の現状：SACERSの特別支援に関する尺度と育成支援の質の関連	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 別府大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 135-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32289/tk04212	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原航平	4. 巻 12
2. 論文標題 放課後児童クラブにおけるOJTの状況と育成支援の質の関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学童保育研究	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 垂見直樹	4. 巻 2022年12月号
2. 論文標題 「保幼小連携」の現状と課題 「うまくいく」には何が必要か？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋晴子	4. 巻 第59巻2号
2. 論文標題 公民館における子育て期の親の学びとその支援について 家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 九州女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋晴子・小池正博	4. 巻 第21号
2. 論文標題 コロナ禍における団地の子どもの活動 A市B公営団地の事例 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本 (大村) 綾	4. 巻 第52巻
2. 論文標題 子育て支援の質向上に向けた地域システムの構築に関する研究序説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西九州大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原航平	4. 巻 第41号
2. 論文標題 放課後児童クラブにおける育成支援の質 OJTやSACERSの相互関係と育成支援の質の関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 別府大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永田誠	4. 巻 第20号
2. 論文標題 親の「語り」を通した子育てにおける「学び」に関する考察(2) クラス別懇談会での親の「語り」の変化に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会誌『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋 晴子	4. 巻 4
2. 論文標題 地域活動参加が生活困難を抱えた子育て家庭の幼児にもたらす効果や影響 公営団地で試みた実践事例をもとに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 基礎教育保障学研究	6. 最初と最後の頁 72-88
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.32281/jasbel.4.0_72	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮嶋晴子	4. 巻 第57巻1号
2. 論文標題 家庭教育支援等施策における子育てグループ活動の位置づけ 「子育てネットワーク」の用語分析を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州女子大学『九州女子大学紀要』	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原航平	4. 巻 第40号
2. 論文標題 放課後児童クラブにおけるOJTと育成支援の質の関連について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 別府大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原航平	4. 巻 第40号
2. 論文標題 保育者を目指す学生の評価尺度を用いた保育評価に関する印象について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 別府大学短期大学部幼児・児童教育研究センター『センターレポート』	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永田 誠	4. 巻 19
2. 論文標題 親の「語り」を通じた子育てにおける「学び」に関する考察 クラス別保護者懇談会における家庭生活に関する内容に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相戸 晴子	4. 巻 19
2. 論文標題 地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容 低所得者層団地の実践事例より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 永田 誠	4. 巻 20
2. 論文標題 親の「語り」を通じた子育てにおける「学び」に関する考察 (2) クラス別懇談会での「語り」の変容に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本生活体験学習学会『生活体験学習研究』	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相戸 晴子	4. 巻 6
2. 論文標題 家庭教育関連法令・政策の変遷にみる子育て主体の位置づけ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育科学論集（宮崎国際大学教育学部紀要）	6. 最初と最後の頁 28-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永田誠・菅原航平・大村綾
2. 発表標題 ポストコロナ社会における「親の保育参加 / 家庭との連携」に関する考察 保育者対象の質問紙調査の結果から
3. 学会等名 日本生活体験学習学会第25回研究大会自由研究発表（口頭発表・大分大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮嶋晴子・垂見直樹
2. 発表標題 保育者の保護者支援のプロセスと保育者の学び 保育者による観察記録をもとに
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会（熊本学園大学）口頭発表
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 永田誠
2. 発表標題 保護者懇談会における親の「学び」の質的考察 Aこども園クラス別懇談会での「語り」を事例に
3. 学会等名 日本社会教育学会第69回研究大会自由研究発表（北海道大学 / オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木雄清・永田誠・菅原航平
2. 発表標題 幼児期の養育者の養育態度と大学生のマインドセットとの関連
3. 学会等名 日本生活体験学習学会第24回研究大会自由研究発表（口頭発表・熊本県立大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮嶋晴子・正平辰男
2. 発表標題 幼児の生活体験活動とその姿をとらえる保育者の視点について 飯塚市庄内生活体験学校の事業参加アンケートの分析より
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会（口頭発表・オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮嶋晴子・桑原広治・末寄雅美・正平辰男・原和也
2. 発表標題 保育者を対象とした生活体験プログラムについて - 保育者体験講座の参加者の感想の分析を中心に -
3. 学会等名 日本生活体験学習学会第24回研究大会自由研究発表（口頭発表・熊本県立大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原航平
2. 発表標題 放課後児童クラブにおける研修の状況と育成支援の質の関連
3. 学会等名 日本学童保育学会第11回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永田誠・菅原航平
2. 発表標題 親の「語り」を通じた子育てにおける「学び」に関する考察(3) Aこども園クラス別保護者懇談会のテキストマイニングから
3. 学会等名 日本生活体験学習学会第22回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 垂見直樹
2. 発表標題 保育雑誌における集団の語られ方 - 『幼児の教育』『季刊保育問題研究』を手がかりに -
3. 学会等名 日本保育学会九州・沖縄地区第5回研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮嶋(相戸)晴子・正平辰男
2. 発表標題 幼児の生活体験を育む環境構成の考察 福岡県飯塚市庄内生活体験学校の事例をもとに
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会(口頭発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 正平 辰男・宮嶋(相戸)晴子
2. 発表標題 園児の野外における生活体験の支援活動 福岡県・飯塚市庄内生活体験学校が提供した活動内容と園児の様子
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会(ポスター発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 永田 誠
2. 発表標題 親の「語り」を通じた子育てにおける「学び」に関する考察(2) 懇談会での「語り」の変容に着目して
3. 学会等名 日本生活体験学習学会第21回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相戸 晴子
2. 発表標題 学童期以降の子どもの姿から考える地域の子ども・子育て支援実践の可能性
3. 学会等名 日本社会教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相戸 晴子
2. 発表標題 「子育てネットワーク実践がもたらしたもの」を検証する
3. 学会等名 日本社会教育学会(ラウンドテーブル「子どもに関わる大人の学び-親のエンパワーメントを支える関わりをさぐる」報告)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相戸 晴子
2. 発表標題 生活困窮家庭の子どもが地域活動に参加する可能性 乳幼児期からの地域参加支援実践の事例より
3. 学会等名 基礎教育保障学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 垂見 直樹
2. 発表標題 子どもの「主体的な学び」へ転換 ある保育園の事例から
3. 学会等名 保育参加を通じた親の「学びの物語」プロジェクト第1回公開シンポジウム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 太田光洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同文書院	5. 総ページ数 224
3. 書名 子ども家庭支援論－保育を基礎とした子ども家庭支援－	

1. 著者名 元兼正浩, 宮嶋晴子他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 花書院	5. 総ページ数 298
3. 書名 教育制度論エッセンス	

1. 著者名 垂見 直樹、池田 竜介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 176
3. 書名 幼児教育・保育のための教育方法論	

1. 著者名 垂見 直樹, 大村 綾 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 豊かな育ちのための保育内容総論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>子どもと親の学びを生み出す発達資産としての生活体験を育む「地域家庭教育支援」 http://www2.ed.oita-u.ac.jp/nagata/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	垂見 直樹 (TARUMI Naoki) (10581473)	近畿大学九州短期大学・保育科・教授 (47110)	
研究分担者	宮嶋 晴子 (MIYAZIMA Haruko) (20598122)	九州女子短期大学・子ども健康学科・教授 (47106)	
研究分担者	鈴木 雄清 (SUZUKI Yusei) (00333253)	大分大学・IRセンター・准教授 (17501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 綾 (大村綾) (MATSUMOTO Aya) (60589406)	西九州大学短期大学部・幼児保育学科・准教授 (47202)	
研究分担者	菅原 航平 (SUGAHARA Kouhei) (90768540)	福岡県立大学・人間社会学部・講師 (27104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関